

＜総評＞伝統詩形をバックボーンに踏まえながら、その中に自由な発見や社会性や批評が編みこまれている口語詩句のスタイルが、だんだんと現れてきている感じがします。それに連れて作品の安定感も出ているようです。

国旗疲れて春風にただ相槌

---

長谷川柊香 埼玉県

——国とか国民とかの概念があいまいになってきたような錯覚を起こしそうな世相。とりあえず相槌を打つしかない国旗があわれ。

就活のはなしをされて

ものくろの躑躅を

ひろうようにうつむく

---

さいう 石川県

——無彩色の躑躅という鮮やかなイメージ。

口下手で梅のしたまで来てしまう

---

松下 誠一 東京都

——オロオロしているうちに行く心算もないところへ来てしまった。その原因が「口下手」とは発見だがよくあることでもある。

踏み台に乗り立春の手術室

---

Azusa 京都府

——卵が立つという立春に、手術台に登る足元は心もとないだろう。

ぼおっとする 2 が頭を支配して

1 とはなにが違うんだっけ

---

志内 悠真 京都府

——確かに、2 も 1 も 1 0 0 も 1 0 0 0 も記号はひっくるめてみんな「ぼおっとする」仮のもの。

折り紙は  
折り紙の何とかになるから  
偽物なんて呼ばれずにいる

---

岡村 奏汰 茨城県

——電子マネーや仮想通貨に押されて、お札の方が怪しくなっているのに、折り紙の鶴の  
生き生きとしていること。

白ばらの摘まれたあとをふりかえ  
り雨は春からさえぎっていく

---

雲理そら 大阪府

——既に無いものを詠んで存在を際立たせる日本の詩歌の伝統が、雨と春にまで及んでいる  
のは鮮やか。

春風のアンダースロー受け止めて  
生まれる前の草原にいる

---

常田 瑛子 山口県

——気づかぬほどゆるやかに押し寄せてくるもの。生まれてくるためのいのちの指令はそ  
ういうものなのだろう。

狗尾草  
本当の友達をさがしている

---

金光 舞 埼玉県

——道端によく生えている狗尾草（エノコログサ）。何気なくさり気なく、そばにいてくれ  
る友達が欲しい。この作者は身近な植物に本質を見る。

水だった頃の記憶を旋律に  
きらきら零すグランドピアノ

---

橘來花 岐阜県

——生きとし生けるものはすべて水だった。原初の記憶を呼び戻すような音の輝き。

竹林をのびちぢみして石鹼玉

---

ムクロジ 群馬県

——竹林であることによって、石鹼玉の動きがまざまざと目に見える。

採寸のメジャーの戻る春の昼

---

檜野 美果子 宮城県

——「春の昼」と「採寸のメジャー」の何気ない取り合わせが、まるで悠久に続く平和を思わせる面白さ。

致死量の核家族を浴びる

---

塩見 伴 沖縄県

——言葉の面白さと恐ろしさ。

唇を触っても春来ないしね

---

松浦やも 東京都

——自分でも気づかない何気ない動作に、思いは現れる。官能的な唇と春。

納豆によく付いてくる責任感

---

互井宇宙論 埼玉県

——分かっているが割り切れない。すっきりしないねばねば感。納豆と責任感がよく似ている。